

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語		算数	
	5年時	6年時	5年時	6年時
H27 入学	61.1		66.1	
現 5 年	(0.94)		(1.01)	
H26 入学	68.0	65.0	74.0	64.3
現 6 年	(1.02)	(1.01)	(1.04)	(0.98)
H31 正答率の全国比		(1.02)		(0.97)

◎5年時は佐賀県学習状況調査，6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率，下段()は，県平均を1としての比較。

◎「H31 正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

【現5年】

- ・県平均と比較してみると，算数ほぼ同等，国語に少し課題が見られる。これは，4年時12月調査と同様の傾向と言える。

国語について

- ・「漢字の読み・書き」および「部首」についての設問に関して，正答率が高くなっている。日々の授業での取り扱いを丁寧に行ったことが，結果に表れていると考える。また，漢字や計算など基本的事項に関して全校での共通した取り組みを行ったこと，毎日の宿題等での繰り返しの指導を行ったこともこの結果につながっている。
- ・「話す・聞く」，「書く」については，正答率が低いものが多く，かつ，県正答率と比べて10ポイント以上の開きが見られるものがいくつかあった。与えられた情報を理解し，それに対する質問や意見を考えたり，理由を明確にしながらか文章を構成したりする部分を苦手としていることが分かる。文章全体の内容を把握し，求められていることに適切に対応することができるように，読み方を意識した学習を行う必要がある。
- ・「ローマ字」で書く設問では，正答率が低いことに加え無解答率が高いことから，まだ十分に定着していないと言える。普段の生活の中でも，意識的に触れさせる機会を増やす必要がある。

算数について

- ・観点別にみると，「技能」「知識・理解」に関しては，おおむね達成を越えている。習熟の時間を確保するだけでなく，補充の時間を設定し，学校全体として取り組んできたことの成果と言える。「考え方」については，県平均と同等ではあるが，十分達成との開きが20ポイント以上と大きく，本校の課題と言える。
- ・四則計算や公式を使って面積等を求める部分についての知識は，正答率が8割を越えるなど十分定着している。ただし，大きな数の位取りや単位の正答率が低い。実際にイメージしにくいものの量感をつかめていない。可視化できるような提示の仕方を考えたり，学習した内容と生活を結びつける活動を設定したりしながら，学習したことを生かす力を身に付けさせる必要がある。

【現6年】

- ・国語、算数ともに県平均と同等の状況である。昨年度と比べて大きな変化は見られない。

国語について

- ・どの領域も県および全国平均と同等の結果と言える。その中で、ことわざの意味を理解して、自分の表現に用いる設問では、約 10 ポイント上回っている。逆に、話し手や書き手の意図を捉え、目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にしながらまとめる部分に課題が見られる。記述式の無回答率が他のものに比べると低い。得た情報に対する自分の考えをまとめ、構成しながら書くという機会を増やしていくことが重要である。

算数について

- ・領域別に見ると、「数と計算」では、県平均を 3 ポイントほど上回っている。きまりをきちんと理解して、与えられた計算に取り組む様子がうかがえる。「図形」に関しては、10 ポイント以上下回っている。特に、図形の性質や構成要素に着目し、ほかの図形を構成する設問の正答率が低い。念頭操作が十分できていないと思われるので、具体物の操作から念頭操作へと、図形に触れる機会を増やしていかなければならない。

【意識調査(5・6年)】

家庭での生活について

- ・朝食摂取率が高く、起床・就寝時間もきちんと決めている児童が多いことから、基本的な生活習慣が身についていると言える。児童および保護者に対して継続して行ってきた「早寝・早起き・朝ごはん」の呼びかけが、効果的であったと考えられる。
- ・平日の読書時間が 1 日 30 分以上と答えた児童が 66.6%と高く、県(40.8%)・全国(39.8%)を大きく上回っている。また、時間を見つけて図書室や図書館に行く児童の割合も高い。校内での多読者の称賛や家庭との連携の成果と考える。

地域との関わりについて

- ・「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問に対し、「している」と答えた児童が 80.9%と、県(77.4%)・全国(68%)を上回っている。また、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」に対しても、「当てはまる」と答えた児童が 79.3%と、県(57.6%)・全国(54.5%)を 20 ポイント以上、上回っている。このことから、地域とのつながりの深さや、地域の一員としての所属感の高さうかがえる。これまでの、地域、家庭と学校が連携しながら児童の育成への取り組みが結果として表れている。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

1 基礎基本の定着と活用力を育成する授業の実践

- ・「授業づくりのステップアップ 1・2・3 vol.1&2」を基本とした授業づくりに努める。特に、本校の課題を解決していくために、必要な条件や具体的な書き方などを示した上で、「書く活動」に取り組ませる。また、「めあて」を意識させ、それに関わるキーワードを使って、自分なりのまとめやふり返りが書けるような指導を行う。
- ・話し合い活動のバリエーションを増やし、場面に応じた活動にできるようにする。ICT 機器の効果的な活用も念頭に置き、全員が共通認識をもって話し合いに参加できるようにする。言葉だけでなく、視覚的にも確認しながら全体でのまなびを行う。

2 授業形態の工夫

- ・算数における基礎・基本の定着のため、指導法改善担当を中心に各単元についての教材研究を行い、少人数での授業と TT による指導を児童の実態および学習内容に合わせて選択していくことで、より

効果的な学習を行う。

3 主体的な学びを促す環境の整備

- ・ 掲示物の場所に配慮し、学習に集中できるような学習環境を整える。また、活用力を育てるために既習事項や児童が身に付けなければならない学習用語をまとめ、教室に掲示する。大切な語句を確認するとともに、それを使いながら発言する意識をもたせる。

4 学び向かう態度の育成

- ・ 学習用具の確実な準備や時間を守ることを徹底させる。また、「挨拶、返事、言葉遣い」など、望ましい学習態度を身に付けさせるよう、全職員で取り組んでいく。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- 1 朝の時間に行う「花まるタイム」で図形に対する感覚を身に付けることができるメニューに重点手的に取り組む。実施方法や内容について定期的に意見交換を行い、学力の向上につながるよう学校独自に改善を図っていく。
- 2 家庭学習の習慣化、また、主体的に学ぶ力を身に付けさせるために、自主学習に取り組ませる。予習・復習の仕方を学年に応じて再度指導を行ったり、メニューの紹介をして取り組む内容の幅を広げさせたりすることにより、考えて学ぶ力や習得した知識や技能を活用する力を育成する。
- 3 毎月1日の「ノーテレビ・ノーゲーム」について実施を継続するとともに、家読の推奨（毎月1日）を引き続き行う。